

「井上ひさしと安野光雅」

～文学と絵画の出会い～

市川市芳澤ガーデンギャラリー 学芸員 森 綾子

安野光雅さんと言えば、数々の賞を受賞された日本を代表する絵本画家、あるいは日本や海外の景色を情緒豊かに描く風景画家としてよく知られています。しかし、6000冊を超える本の装丁を手掛けたデザイナーであることは、余り知られていないのではないのでしょうか。当財団の前理事長である井上ひさしさんの代表作『吉里吉里人』や『腹鼓記』の表紙も、安野さんの手によるものです。また、井上さんが座付作家を務めたこまつ座でも、宣伝美術として数多くのポスターを描いています。本展では、二人の巨匠が共に手掛けた作品を中心に、文学にまつわる安野作品の数々を紹介いたします。

©空想工房2012

「この人から受け継ぐもの」
装画 2010年

展覧会の企画書を持って初めて安野さんを訪ねた日、「そういえば、この前井上さんによく似た人を見かけたんだよ」と、安野さんは企画書の裏に井上さんの似顔絵を描きはじめました。「まさか井上さんがいるわけない、と思って驚いたね。」そう言いながらさっと描かれた似顔絵は、飄々とした横顔が印象的なものでした。

安野さんは、本の表紙やポスターに井上さんの似顔絵を度々描いています。エッセイ集『わが人生の時刻表』の表紙では、井上さん扮する新郎の隣に憧れの女優を花嫁姿で描くサービス精神をみせ、彼が亡くなってから発行された『この人から受け継ぐもの』の表紙では、芝居の垂幕を用いて象徴的な井上ひさし像を描き上げました。

二人三脚で沢山の仕事をしてきた両氏ですが、そもそもの出会いは43年前にさかのぼります。当時「ひょっこりひょうたん島」で大成功をおさめた井上さんが絵本『ガリバー』の文を書くことになった時、挿絵を担当したのが、絵本画家・安野光雅でした。昨年、偶然にこの古い絵本

を見つけた安野さんは、「何日も島で暮らすガリバーにひげがないのはおかしい、もう一度描き直したい」と思ったそうです。そしてこの春、挿絵を一新した『ガリバーの冒険』が発行されました。本展では、この描き下ろし原画15点を一挙公開しています。この作品の中にも、安野さんは所々に井上さんの姿を描きこみました。最後のページでは、舟に乗り大勢の小人たちに別れを告げるガリバーに、去りゆく友の姿を重ね合わせています。この一冊は、安野さんが忘れぬ友人井上ひさしに奉げたオマージュと言っても過言ではないでしょう。

©空想工房2012



「ガリバーの冒険」より 2012年

今回展示しているものの中には、お互いがヨーロッパに滞在していることを知った安野さんが井上さんに送ったFAXと、直筆の返信があります。これは、旅の記録を綴った井上さんの手帳の間に小さく折りたたんで保管されていたものです。奇跡としか言えない発見に、私達学芸員は小躍りして喜びました。また、子ども達に配布しているワークシートは、安野さんご本人に何度もご指導頂きながら作ったものです。先生は「子どもを大人と対等な目線で見ること」「子どもに負担を感じさせないこと」を注意し、一字一句まで手直して下さいました。ワークシートの最後には、子どものための特製サインスタンプ「安野先生の太鼓判」を押すことができます。

このように、本展は井上ひさしさんに対する安野さんの友情と、その二人に関わる多くの方々のご協力によって、まさに特別な展覧会となりました。絵本を読むコーナーもあり、子どもから大人までご家族で楽しめる展覧会です。どうぞギャラリーで文学と絵画にふれる贅沢なひとときをお過ごしください。

画像提供：津和野町立安野光雅美術館